

幼年期における伝承遊びについて

—「羽根つきうた」—

A Study on Traditional Play in Childhood: Song of HANETSUKI

飯泉祐美子(帝京科学大学)

Yumiko IIZUMI (Teikyo University of Science)

(キーワード)

羽根つきうた、伝承遊び、幼年期

1. はじめに

飯泉(2019)では、近年の幼年期の子ども達の「一人遊び」で危惧される問題の解決の一助として「伝承遊び」に着目し、その一つである「はないちもんめ」は、学力の三要素にも繋がる学びのある遊びであることを述べ、更に、保育内容の五領域という視点からも、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の五領域の成長の一助になっている事を述べた。また、その際に、学問的に学びを知らない時代の日本固有の文化である伝承遊びが「保育」「教育」「子どもの育ち」を踏まえ、あたかも考え抜いたかのような「価値」のあるものである事も、再確認した。

本発表は、これらを明らかにした、飯泉(2019)の後続研究である。本発表では伝承遊び「羽根つき遊び」に着目した。

「羽根つき遊び」は「はないちもんめ」と同様わらべうたをとまなう伝承遊びである。屋外遊びであり(健康)、コミュニケーションを必要とする遊びであり(人間関係)、数を数える遊びであり(環境)、言葉遊びをする遊びであり(言葉)、歌を歌いながら遊ぶ遊び(表現)の五領域の成長に通じる遊びの一つであると考えられる。

「羽根つき遊び」は、古代から主に女兒達の正月遊びのひとつとして、遊ばれてきたものであった。

私の子どもの頃(1970年代)も、「羽根つき遊び」は正月の女兒の遊びの一つとして、近所の子ども達が誰となく集まって一般的に行われていたような思い出がある。私の通っていた幼稚園ではその季節になると、女兒は羽子板に絵を描き、その羽子板を用いて羽根つき会が行われた。しかし、それから約四半世紀の後に幼年期を迎えた我が娘達は、羽根つきの経験は殆どなく、そのイメージは浅草などの羽子板市で売られている「藤娘」や「武者」が飾られた、いわゆる飾り物の羽子板だという。

つまり「有用性」があるにもかかわらず、衰退している事も明らかな事実である。

そこで、今後の復活や伝承のために、本発表では音楽的な側面に関しての分類を行なった。

2. 羽根つきうたの採譜楽譜の分類

現在、北海道、山形県、沖縄県を除く44都府県の「羽根つきうた」は採譜によって保存されているが、大別、類型化された先行研究は確認できない。その為、伝承されている「タイトル」、「地域」、「歌詞」「音楽的要素」等をもとに類型別に整理した。

「ひとごやふたご」「ひとめふため」「ひとりきな」が全国的に同タイトルで分布している。しかしその類型は多様であることが明らかとなった。